

学会ハイライト

第33回日本乾癬学会学術大会

(2018年9月7日, 8日 松山市, 松山全日空ホテル)

村上 正基

愛媛大学大学院医学系研究科分子機能領域皮膚科学 准教授

はじめに

2018年9月7, 8日, 佐山浩二教授を会長とし, 第33回日本乾癬学会学術大会が開催されました. 本学術大会の事務局長を務めさせていただきました村上より学会の報告をさせていただきます.

日本の9月といえば台風シーズンの真っ只中で, 当然開催に際して天候不安の要素はうすうす予想されてはいましたが, 本当に台風21号が学会直前の9月4日, 徳島に上陸するというハプニングに見舞われました. 佐山教授の日ごろの人徳もあってか, 開催地松山にはまったくといっていいほど被害はなかったものの, 関西空港水没, その直後の北海道胆振東部地震による札幌千歳空港の閉鎖などが相次ぎ, 学会招待演者の来松が危ぶまれるといった問題が, 開催前だけでなく開催中にも付きまとい, 最後まで気が抜けなくなりました. 台湾のEric Lan教授からは, 来松予定前日深夜に, 関西空港が水没したため予定フライトがキャンセルになったと連絡をいただき, 慌てて私自らPCと格闘し代替プランを作成・航空券手配の相談を行い, なんとか来松していただくことができました. 「行けなくなったよ」といえば済む話なのに, なんとか来日するといってくださったLan教授には感謝の念で一杯です. 同様に, とくに北海道札幌からの先生方は, たいへんご不便があったにもかかわらずほとんどの皆さんが参加してくださいました.

会場で何人もの先生方から, 「何があっても絶対行こうと思っていたよ」と笑顔でお声がけいただいたときには思わず泣きそうでした. ただただ諸先生方への感謝の念で一杯です. 本学術大会を成功させるにあたり, 非常に多数の先生方の善意をいただきましたこと, この場をお借りして厚くお礼申し上げます.

波乱の幕開けとなった本学術大会でした. 本学会は伝統的にどちらかといえば臨床系のカラーの強い学会ですが, やはり会長の佐山教授が皮膚科研究者として国内外から認識されていることもあり, 臨床色のみならず研究色, 可能ならば基礎研究に関する演題や海外講演者を多くしてグローバルな内容を盛り込んだ学会にしたい, という思いを込めたプログラムを企画させていただきました. そんなこともあり, 本学術大会のテーマは, “さらなる高みを目指して”となり, これを踏まえて「坂の上の雲」のイメージ(精神?)を前面に出そうということになりました. その後, 坂の上の雲ミュージアムの全面協力を得ることができまして, 秋山真之に関するミニパネル展示会なども実現することができました. マニアの先生方よりご好評いただきましたこと, たいへん嬉しく存じます.

特別講演・シンポジウム

特別講演には大阪大学免疫学フロンティア研究

センターの審良静男教授、東京理科大学生命医科学研究所の岩倉洋一郎教授をお招きしました。審良教授からは「炎症・免疫応答に関わるリボヌクレアーゼRegnase-1の機能と制御」と題するご講演があり、自然免疫系遺伝子であるRegnase-1の同定、炎症性遺伝子mRNAを分解するendonucleaseとしての機能および抗炎症性作用などについてご紹介いただきました。岩倉教授からは炎症性サイトカインIL-17A/Fの機能解析、マウスモデルおよび乾癬や関節リウマチなどの疾病に対する治療への応用などに関してご講演をいただきました。さすがに日本を代表する基礎研究者の先生方のご発表は、その豊富なデータ量とそれに裏付けされた理論展開が美しく、われわれ臨床研究者(あるいは皮膚科臨床医)にとっても非常に印象深く、そして興味深いものであったと思います。

シンポジウムは、佐山教授のご要望で「腸内細菌とメタボリックシンドローム」およびCutting edge from the bench (英語セッション)、私の思入れで「掌蹠膿疱症とマイクロバイオーーム」、と題した合計3シンポジウムを企画させていただきました。「掌蹠膿疱症とマイクロバイオーーム」は「腸-唾液腺相関と口腔マイクロバイオーーム」神奈川歯科大学大学院歯学研究科口腔科学講座環境病理学分野教授の榎木恵一先生、「掌蹠膿疱症の水疱内膿疱とマイクロバイオーーム」愛媛大学の黒木(増田)香奈先生にご講演いただきました。病巣感染が掌蹠膿疱症に大に関わることから、いままでない切り口でお二人に講演をお願いしましたところ、朝一番のシンポジウムであるにもかかわらず、かなり多数の先生方にご参集をいただきました。「腸内細菌とメタボリックシンドローム」では、「高脂肪食と乾癬・皮膚免疫」京都大学医学部附属病院講師の本田哲也先生、「メタボリックシンドロームと腸内細菌」東京農工大学大学院農学研究科応用生命化学専攻テニュアトラック特任准教授の木村郁夫先生、「腸内細菌による慢性炎症の制御」慶應義塾大学薬学部薬科学科教授の長谷耕二先生よりご講演をいただきました。どれも基礎医学の演題にもかかわらずかなり多数の先生方にご

参集いただきました。私事ではございますが、榎木教授は私が病理医時代に一緒に研究・病理診断業務をした仲間であり、長谷教授はUCSDでポストドク時代を一緒に過ごした仲間です。この学会中に旧交を温めることができたことをたいへん嬉しく思います。

国際的な研究シンポジウムをやりたいという佐山教授のご希望を受けて企画しましたが、Cutting edge from the benchです。2日目の午前中で、英語基礎研究シンポジウムです。どれだけの聴衆がお越しになるか心配でしたが、これも予想を超える多くの先生方にご参加いただくことができました。「IL-26-producing T cells represent a distinct subset of pathogenic Th17 cells in acute psoriasis」Michel Gilliet教授 (Lausanne, Switzerland), 「The combination technology of gene-engineered mice and lipidomics elucidates new lipid pathways : Discovery of new bioactive lipid as a regulator of epidermal hyperplastic diseases」Kei Yamamoto准教授 (Tokushima, Japan), 「Psoriasis and Severe Vascular Complications : From Epidemiological Studies to Mechanistic Insights」Cheng-Che E. Lan教授 (Kaohsiung, Taiwan)をお迎えしました。研究色の強い演題で公用語を英語と設定したシンポジウムでありましたが、私自身も学会当日の事務局長の仕事をしばし忘れて(放棄して?)聴衆の一人としてご講演に魅了されました。日本の代表として徳島大学の山本先生にご奮闘いただけたことも心より感謝お礼申し上げます。

海外からの招待講演

海外招待講演者(スポンサー)としては、「The Journey to Clear Skin in Psoriasis」Dr Brian J. Nickolof (Eli Lilly and Company, USA), 「Psoriasis and Comorbidities」Dr. Robert Bissonnette (Innovaderm Research, Incorporated), 「Where Does Otezla (apremilast) Fit into the Rapidly Evolving Treatment Landscape for Plaque Psoriasis?」Dr. M. Shane Chapman (Dartmouth-



図1 懇親会。夏井いつき・ミニ俳句ライブ。右は夏井いつきさんに滅多切り(?)にされる町野博先生(第35回日本臨床皮膚科医会総会・会頭)。

Hitchcock Medical Center, USA)のご講演をいただきました。またシンポジウム3でご講演いただいたMichel Gillie教授には「IL-17A Targeting treatment in Psoriasis」と題して、もう一講演をいただくことができました。皆さん、バイオリジクスなどの乾癬治療に関わる第一線でご活躍の先生方であり、日本でも過去に数回ご講演をいただいているので、参加された先生方にとってもなじみ深い講演者であったと思います。

文化講演

招待講演は「『坂の上の雲』と松山」と題して、松原正毅先生(坂の上の雲ミュージアム初代館長)にご講演いただきました。座長は「坂の上の雲」についてはこの方しかありえないだろうということで、杏林大学名誉教授の塩原哲夫先生にお願いしました。終盤はお二人のトークショーのようになり、終了時間となってもその熱気を失うことなく、掛け合いが続いていたことが印象的でした。やはりマニア同士のトークはいずれも同じと微笑ましく思ってしまったのは私だけではないと思います(その後に続く、懇親会会場準備が心配でしたが…)。

教育講演

教育講演は4題でした。「皮膚科が行える乾癬へ

の栄養学的アプローチ」白井厚治先生(日本臨床栄養学会理事長、日本肥満症治療学会理事長)、「モデルマウスを用いた乾癬病態の解明」高知大学皮膚科准教授の中島喜美子先生、「医学研究における法と指針について」筑波大学医学医療系医療情報マネジメント学講師の古田淳一先生、「指導医は若手医師をどのように育てていくか」昭和大学医学部医学教育学講座教授の泉美貴先生からご講演をいただきました。それぞれ新専門医制度における「皮膚科領域講習」，“専門医共通講習”の認定を得ることができ、立ち見の聴衆者が出るほどの盛況ぶりでした。ご不便をおかけしたことをお詫び申し上げます。

懇親会にて(図1)

懇親会で夏井いつきさんをお呼びすることができたのは、旭川厚生病院の橋本喜夫先生のご尽力がありました。夏井サイドより当初はお引き受けできないといわれたのですが、同じ俳人である橋本先生に泣きついて、再度お声がけいただいたところ実現できたというわけで、予想以上に素晴らしい出し物となり、関係諸氏からも高い評価をいただくことができました。持つべきものは友人・恩人だとつくづく思い、いずれは自分自身も何かお役に立てるようになりたいものと自己反省いたしました。



図2 学会記念撮影

最後に

おかげさまで予想をはるかに超える、150の一般演題、1,000人近い参加者があり大盛況のうちに学会を終えることができました。当初のもくろみ通り、研究色を少しばかり強く出すことのできた乾癬学会となり、会長・佐山教授の個性があふれる学会となったと自負しております。ここ松山は、道後温泉など旧所名跡なども数多くあり、案外市内観光にお出かけになって会場は少し狭くてもなんとかなるかなと思う節もあったのですが、実際

にはどこの会場もかなりの聴衆にご参加いただき、講習などについては立ち見が出てしまいました。皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。また、これだけのプログラムを要するために、多方面にわたりずいぶんいろいろな方々にご迷惑をおかけしてしまいましたが、皆様のお気持ち、お力添えをいただいででき上がった乾癬学会だったとたいへん思い出に残りました。この場をお借りして、関係諸氏ならびにご参加いただいた諸先生方に厚くお礼申し上げます。